

I-JASにおける 語彙の分析から見えること

国立国語研究所

小西 円

2016/12/3

学習者コーパスワークショップ

1

はじめに

●本発表で行うこと

I-JAS（多言語母語の日本語学習者横断コーパス）

を用いて、

コーパス駆動型研究（corpus-driven study）（石川2008:69）で

語彙分布から、探索的に学習者と母語話者の相違を探索

●分析のポイント

- ・学習者と母語話者の産出語彙はどのように違っているか
- ・タスクの違いは、学習者と母語話者の産出語彙にどのような影響を与えるか



2

調査対象

●対象となるタスク

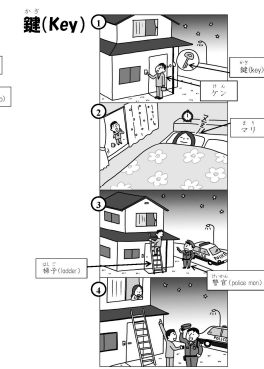
- ・ストーリーテリング 1（以下、ST1）
- ・ストーリーテリング 2（以下、ST2）
- ・ロールプレイ 1（以下、RP1）
- ・ロールプレイ 2（以下、RP2）

●対象となる学習者・母語話者

- ・学習者群 15名×12言語 + 日本国内の学習者30名 = 210名（中級レベル）
- ・母語話者群 15名

3

ストーリーテリングとは



●絵を見て話すタスク

●独話形式（迫田他2016）

●ST1：「朝、ケンとマリはサンドイッチを作りました」から始まるストーリー

●ST2：「ケンは、うちの鍵をもっていないでした」から始まるストーリー

4

ロールプレイとは

●RP1：依頼

あなたは、飲食店でアルバイトをしています。接客スタッフとして注文を取ったり、料理を運んだりしています。勤め始めてからずっと接客の仕事をしてきたので、この仕事にもすっかり慣れ、知り合いのお客さまも増えました。今は、一週間に三日アルバイトをしています。しかし、忙しくなってきたので、一週間に二日に変更したいと思っています。そこで、店長に言って三日から二日に変えてもらうように頼んでください。

●RP2：断り

あなたは、飲食店でアルバイトをしています。接客スタッフとして注文を取ったり、料理を運んだりしています。店長さんから、「料理を作る人が一人やめたので、来月から料理を作る仕事を担当してほしい」と言われました。しかし、あなたは料理は苦手だし、お客さんと接する仕事がしたいので、この話を断りたいと思いました。店長に、料理の仕事を話をじょうずに断って、今の仕事を続けられるように話してください。

●対話形式、コミュニケーション能力、交渉能力を観察する（迫田他2016）

5

分析データの準備

(1) 4つのタスクから、中納言を利用して、品詞ごとに語を抽出

空白、かつこ、非言語行動、あいづちは除外

コーパス検索アプリケーション「中納言」バージョン 2.2.0 短単位データ 20160420 版

(2) 語数を集計し学習者群と母語話者群に分類

(3) 学習者群と母語話者群で特徴度（対数尤度比）を算出し、各群の特徴語を抽出

計算式は田中・近藤（2011）を参照。

$$\text{対数尤度比} = \frac{2(a \ln a + b \ln b + c \ln c + d \ln d - (a+b) \ln(a+b) - (a+c) \ln(a+c) - (b+d) \ln(b+d) - (c+d) \ln(c+d) + (a+b+c+d) \ln(a+b+c+d))}{2}$$

a：当該資料での当該語の度数 b：参照資料での当該語の度数

c：当該資料の延べ語数-a d：参照資料の延べ語数-b

※ただし、ad-bc<0の場合の場合、-1を乗じる補正を行う。

6

特徴度とは

当該資料における当該語が、他の資料（参照資料）と比べて出現度数の点でどの程度特徴的であるかを示す値。

特徴度が0であれば、当該資料と参照資料で当該語の出現の比率は等しい。

特徴度が正の値で、かつ値が高ければ高いほど、当該資料において高頻度という意味で特徴的な語と見なされる。

逆に、特徴度が負の値で、かつ値が低ければ低いほど、当該資料において低頻度という意味で特徴的な語と見なされる。（田中・近藤2011:74）

●本研究では

当該資料：学習者群データ 参照資料：母語話者群データ

有意差0.05以上のもの、かつ頻度が3以上の語を分析の対象とした

7

本発表で分析すること

●頻度が3以上の語で

●母語話者群に特徴的に多くみられる語（母語話者の特徴語）と
学習者群に特徴的に多くみられる語（学習者の特徴語）を比較

実質語代表として：動詞と名詞 機能語代表として：助詞 を分析

●ストーリーテリング と ロールプレイ で

母語話者群の特徴語 と 学習者群の特徴語 に どのような違いがあるか

タイプ1 実質語

タイプ2 機能語（相当の語）

8

S T の特徴語の分析結果

母語話者の特徴

- ・よりこなれた表現
- ・物語の叙述に特徴的な表現
- ・補助動詞の使用
- ・多様な時間表現

学習者の特徴

- ・時間表現の固定化 「時」「後」
- ・「は」の多用
- ・理由表現の固定化 「から」

9

R P の特徴語の分析結果

母語話者の特徴

- ・よりこなれた表現
- ・補助動詞の使用
- ・婉曲表現、配慮表現

学習者の特徴

- ・婉曲としての「かもしれない」
- ・理由表現の固定化「から」
- ・「は」の多用

STの結果と同じ → 機能語は変化なし？

10

タスクの違いはどのように影響しているか

実質語

- ・母語話者も学習者も、タスクに関連した実質語を使っている

機能語

母語話者

- ・ストーリーテリングでは
物語の叙述に特徴的な時間表現、格助詞「が」（格を省略しない）
- ・交渉であるロールプレイでは
婉曲表現、配慮表現を構成する「な」「って」「いう」「思う」「の」など
格助詞の省略

タスクの違いの反映

学習者

STとRPとともに「は」「から」の多用

タスクの違いがない

11

中級学習者の特徴

- ・中級で教えるべき文法は「文と文をつなぐための文法」
中級話者の発話は「表出」的、上級者の発話は「述べ立て」的（山内2009）
- ・上級学習者がタスクとして与えられたナラティブのトピックに応じて比較的柔軟に対応することが可能であるのに対して、中級学習者ではそうではない（南2005）
- ・ナラティブにおけるトピックの連続性/非連続性を表す「は」「が」「ゼロ照応」などは、日本語と近似する文法構造を持つ韓国語話者では中級でもNSレベルに達しているが、英語母語話者では中級・上級で差がある（中浜2013）
- ・書くストーリーテリングでは、習熟度に応じて接続助詞、接続詞の使用の様子が異なる（増田2000）
- ・依頼と断りの発話タスクにおいては、異なるタイプの場面と日本語習熟度は学習者の発話産出に影響がある（真鍋2013）

12

本発表から見えること

中級レベルの学習者が発話場面で使用できる機能語は限られている
 どのようなタスクであっても、使える機能語を駆使してタスクを達成しようとする

しかし、実は、独話のストーリーテリングと、依頼や断りなどの交渉会話では、
 用いなければならない機能語（とそれをを用いた文型）は違う



上級：場面（タスク）に応じた使い分けを学び、それができるようになる段階
 それを支援する段階 ではないだろうか

13

引用文献

石川慎一郎（2008）『英語コーパスと言語教育—データとしてのテキスト』大修館書店

迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子（2016）「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」『国語研プロジェクトレビュー』Vol.6 No.3, 国立国語研究所 pp.93-110

田中牧郎・近藤明日子（2011）「教科書コーパス語彙表」『言語政策に役立つ、コーパスを用いた語彙表・漢字表等の作成と活用』pp.55-63

中浜優子（2013）「タスクの複雑さと言語運用（正確さ、複雑さ、談話の視点設定）との関連性」『第二言語としての日本語の習得研究』第16号, pp.38-55

藤井典子（2005）「日本語学習者のディスコースにおける問題点」南雅彦編『言語学と日本語教育Ⅳ』くろしお出版

増田真理子（2000）「日本語学習者と母語話者のストーリーテリング文を比較する—4コマ漫画のストーリー内容を書いたテキストの分析から—」『多摩留学生センター教育研究論集』第2号, pp.13-25

真鍋雅子（2013）「ポライトネスの視点から見た中上級日本語学習者の発話：依頼と断りの発話行為より」『言語科学研究』19, 神田外国語大学大学院紀要 pp.77-100

南雅彦（2005）「日本語学習者のナラティブ ラボヴィアン・アプローチ」南雅彦編『言語学と日本語教育Ⅳ』くろしお出版, pp.137-150

山内博之（2009）『プロフィシエンシーから見た日本語教育文法』ひつじ書房

14